～自信と誇りに満ちた指中生～　　令和4年5月2日（月）　第2号

指扇中だより

～WE LOVE SASHIOGI！～

〒331-0078　さいたま市西区西大宮３－31－１　TEL 048(624)6234　FAX 048(624)2479

『みずいろの雨』

校　長　　大河内（おおこうち）　範一（のりかず）

雨が降ると時々思い出す、私が中学２年生の頃の話。担任のM先生は、子育て真っ最中の女性で、幼い男児２人を自転車の前後に乗せて通勤していた。「学校の帰りは、これにネギや大根などの買い物袋が増えるからたいへんなのよ」と、和やかな雰囲気で雑談してくれるM先生が私は大好きだった。ただ、ヘルニアか何かで、時々体調が悪くなり学校を休むことがあったので、クラスのみんなが心配していた。

あれは七夕の頃、どこからか採ってきた立派な竹が教室内に設置され、それぞれが「願い事」を書くことになった。私は野球部だったのだが、休日もなく長い時間活動していた時代だったので、雨天による部活中止が何よりの楽しみだった。そこで、短冊には無記名で『雨降れ』と一言書いて満足していた。

M先生の休みがまた続いた時、教室に来た副担任の先生が、竹に飾られた短冊をひとしきり眺めた後、ちょっと不満気な顔で「M先生は、天気が悪いと体が痛むみたいなのよね。雨が降ることを願っている人がいるから、なかなかよくならないんじゃないの？」という話をした。私は少し顔を伏せ気味にして、前席の友達の背中にさりげなく隠れた。確かにM先生の体調のことはまったく考えずに、自分のちっぽけな願いをおもしろがって書いただけだった。「もう少し周りの人の状況を考えながら、言葉を選んで書くべきだったな」とちょっと反省していた。

別の日、副担任の先生から声を掛けられた。「雨降れ短冊」の真犯人を知ってか知らずか、「M先生に、学校を休む日が多くてクラスが心配でしょ？と話したらね、うちは学級委員の大河内くんたちがクラスを守ってくれているから安心なのよ、と言ってたわよ。これからも頼むわね！」と微笑んでくれた。私は火が噴き出ているのか思うくらい顔が熱くなり、心臓が飛び出るかと思うくらい鼓動が高鳴った。遠い昔の日常生活の一場面だが、この心が震えた出来事が、そしてM先生との出逢いが、自分の将来の夢を確実に後押しして、今、こうして学校現場に勤めている。何が人生を左右するかわからないので、私たちはその瞬間（とき）その瞬間を大切にしていかなければならないと痛感する。

中学校を卒業してかれこれ４０年が経っているが、M先生とは今でも年賀状のやり取りをしている。現在は孫たちに囲まれて、穏やかな生活を送っているとのこと。もし今度、短冊を書く機会があったら、『雨降れ』などとは決して書かずに、心を込めて『天晴れ（あっぱれ）』と書きますね！